

淋菌感染症の発生動向、2024年

国立健康危機管理研究機構

国立感染症研究所 応用疫学研究センター

同 感染症サーベイランス研究部

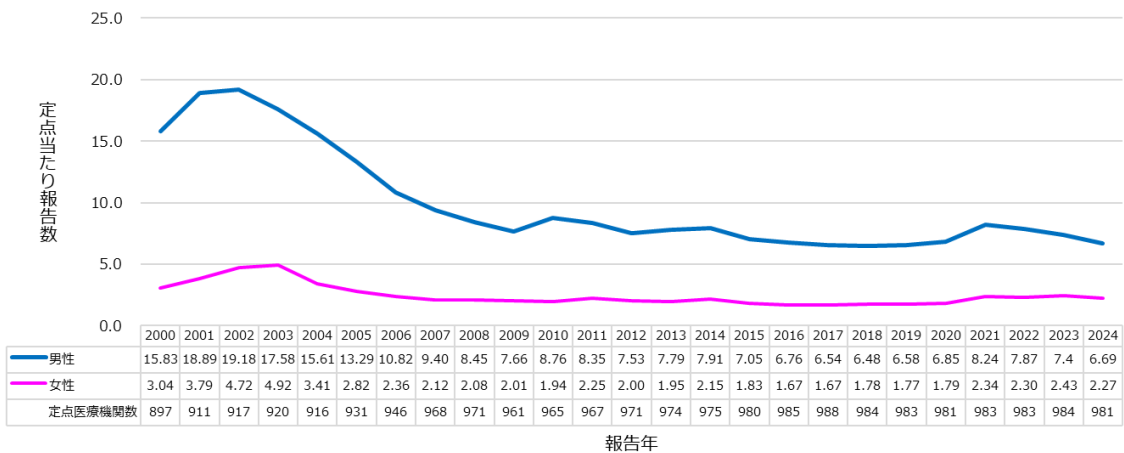
同 実地疫学専門家養成コース (FETP)

2025年11月15日現在

(掲載日：2026年4月28日)

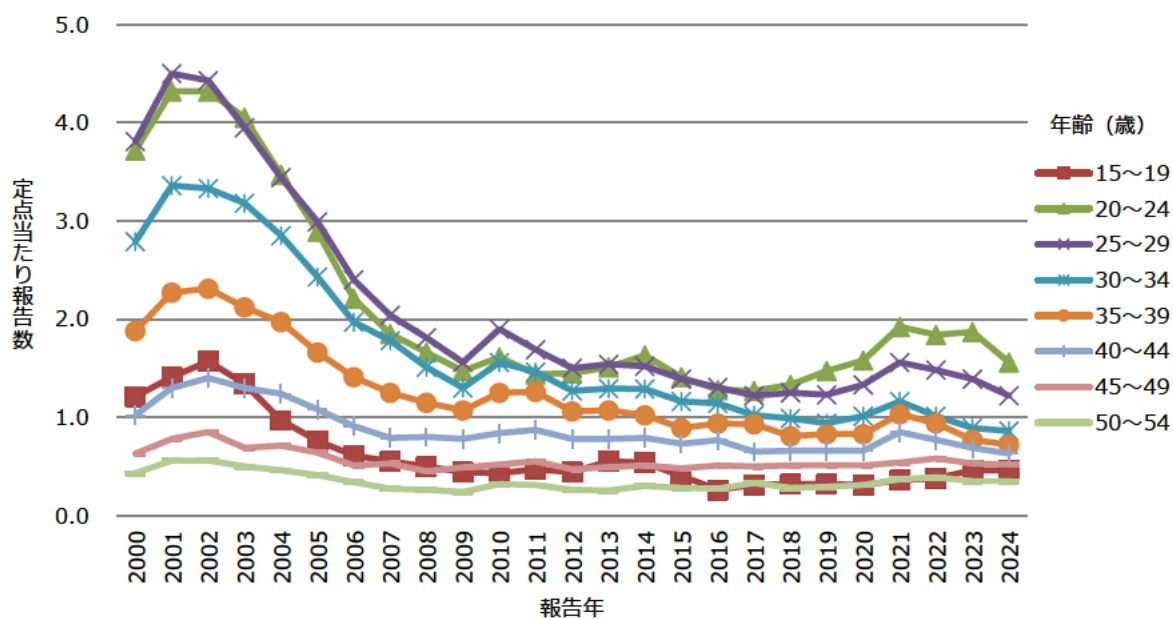
淋菌感染症は *Neisseria gonorrhoeae* を起因菌とする感染症で、男性では尿道炎を女性では子宮頸管炎を主に起こす。淋菌感染症は、感染症法の5類定点把握対象疾患で、都道府県が指定した性感染症定点医療機関から感染症発生動向調査に報告されており、性感染症定点医療機関数は2007年以降1000弱でほぼ横ばいである。性感染症定点医療機関では医師が「症状や所見から淋菌感染症が疑われ、定められた検査方法により診断した」症例について、医療機関の管理者が月単位で届け出ている。定められた検査方法には、尿道及び性器から採取した材料、眼分泌物及び咽頭拭い液での *N. gonorrhoeae* の分離・同定、鏡検による検出、抗原の検出、遺伝子の検出が含まれる。感染症発生動向調査における淋菌感染症の定点当たり報告数は、2002～2003年をピークに減少し、2016年以降はほぼ横ばいであった。2020年以降は男女共に再び増加したが、男性は2022年に減少へ転じた(図1)。

図1 感染症発生動向調査における淋菌感染症定点当たり報告数、2000～2024年



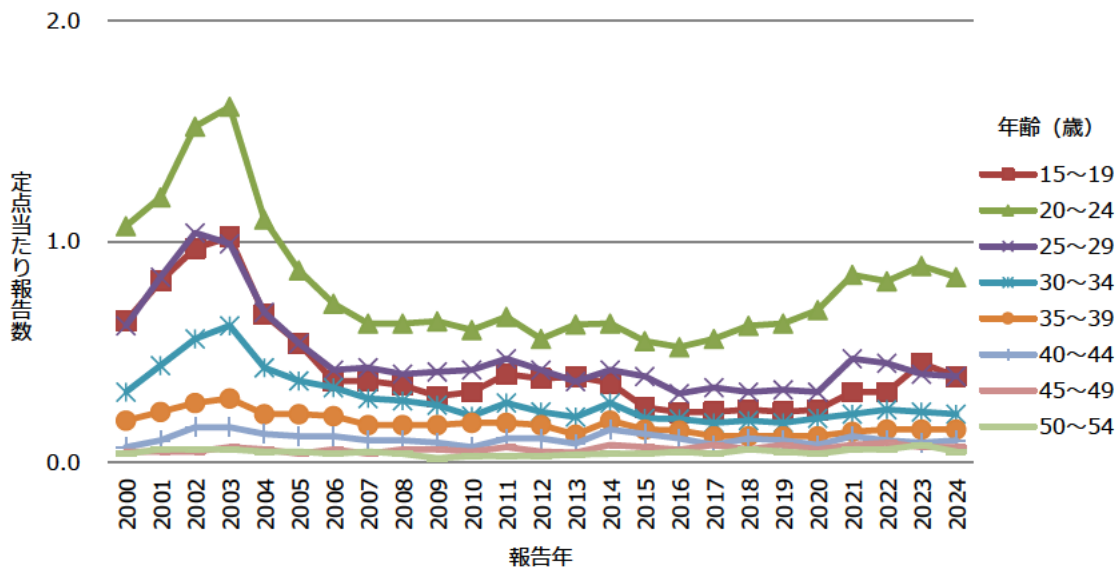
5歳毎の年齢階級別定点当たり報告数は、男性では20代特に20代前半が多かった。2018年から20代前半で増加を認め、2021年から全年齢階級で増加していたが、2022年には20代前半から50代前半で減少に転じ、特に2024年は20代前半の減少が著しかった（図2）。一方、10代後半では2021年から微増後は横ばいであり、2024年は2023年と同程度であった。

図2 男性の年齢階級別淋菌感染症定点当たり報告数、15～54歳、2000～2024年



女性の年齢階級別定点当たり報告数は、2000年以降一貫して20代前半が最も多く、次いで2023年以降10代後半が多かった（図3）。2017年から20代前半で増加を認め、2020年から2021年には20代後半と30代でも増加が認められたが、2022年以降は20代における増加のペースが鈍化から減少に転じた。2020年から増加していた10代後半の定点当たり報告数は、2024年は減少した。

図3 女性の年齢階級別淋菌感染症定点当たり報告数、15～54歳、2000～2024年



2024年の定点当たり報告数は、男性では減少し女性では横ばいであったが、女性では20代前半が2010年代より高い水準で推移していた。若年者における発生の割合が高いことを踏まえ、性感染症に関する特定感染症予防指針に述べられているように、コンドームの適切な使用を含む性教育の推進（特に若年者）と医療機関等において診断された患者への安全なセックスの啓発やパートナーの診断治療の推進が重要である^{1,2}。

参考

1. 厚生労働省健康・生活衛生局感染症対策部感染症対策課「性感染症に関する特定感染症予防指針」（令和7年11月10日）
2. 日本性感染症学会、「性感染症診断・治療ガイドライン2026」